

第5部会

が、人類を宗教から解放するというプロットに基づく）である。他方、ディンターのイエス像は、イエス像構築の為の資料の不在を、独自の心霊論（降霊術によって諸霊から受け取る奥義）によって克服しようとする試みに基づいている。こうした「新啓示」に基づくスピリティズム的イエス像は、一九世紀を通じて次々と登場しており（アンナ・カタリーナ・エンメリク、ヤコブ・ローバー、ヨハンネス・グレーバー、心霊「エマヌエル」等）、ディンターの心霊論的イエス像もこうした系譜に位置付けられるものである。

他方、このようにイエスを殊更「非ユダヤ人」「アーリア人」として描く、反ユダヤ主義的営みは、同時代の宗教史的文脈においては、一九世紀を通して確立・普及した人種主義的イデオロギーの宗教への適用或いは影響という側面だけでなく、体制的教会変革の実践という特徴も有していた。両者は、「本来のキリスト教」回復の為の基盤を、「本来のイエス」の確定に求め、その根拠を当時の人種理論の中に見出したと捉えることもできる。しかし同時に、彼らの「非ユダヤ的・反ユダヤ的イエス」という表象の虚構性への意識は、本質主義的な人種主義「理論」と結びつくことによって希薄化されていたとも言える。

ミシェル・アンリの「キリスト教の哲学」 におけることばの問題

古 莊 匡 義

ミシェル・アンリ（一九二二—二〇〇二）は、フッサール・ハイデガーの現象学を受容しつつ根本的に問い直した現代フランス現象学の代表的な思想家のひとりである。アンリが構築した独自の「生の現象学」は、もともとキリスト教的な側面をもっていたが、晩年のアンリは、自らの「生の現象学」の直接的表現としてキリスト教を「再発見」し、聖書のテキストと「生の現象学」とを絡み合わせた「キリスト教の哲学」へと到達した。

本発表で問題にしたのは、この「キリスト教の哲学」を語るアンリ自身の「ことば」の正当性、哲学の「ことば」の語り方である。アンリの思索が宗教的なテキストと濃密な関係をもつことに必然性はあるのだろうか。アンリ自身、「キリスト教の哲学」は哲学だと考えているが、この思索は哲学を自称することが許されるのだろうか。

この問題を考えるために、「キリスト教の哲学」が扱う「ことば」の概念を説明する。アンリは「世界のことば」と「〈生〉の〈ことば〉」とを区別する。「世界の〈ことば〉」は、このことば自身から隔たつたところに、思考や表象や意味を見えるものにする〈ことば〉である。それに対し、「〈生〉の〈ことば〉」は、こ

の「へことば」自身が自らに隔たりを置くことなく自ら顕になるようなものとされる。この「へことば」は見えるようにすることではなく、見えない根源的な印象、情感的なパトスである。

「生」やアンリの言う「キリスト教の「真理」」もこのような「へことば」で自ら顕れ、他なる基準に拠ることなく自らを証し立てるので、この「生」や「真理」は「世界のことば」や思考では捉えられない。そうであるなら、この「真理」が「真理」であるといかにしてわれわれは実感するのか。そして、この「真理」についての思考である「キリスト教の哲学」そのものの正当性は何に存するのか。

アンリによれば、「キリスト教の哲学」の解明は、「諸存在に何かを考えさせるのではなく、何かを行わせる」ものである。つまり、「キリスト教の哲学」の自証が完結するのは、この哲学と出会った生ける者たちに「何かを行わせ」たことによつて、またその行為・実践によつてである。行為や実践を促すことができるのは、「何かを考えさせる」ものに過ぎない「世界のことば」ではなく、「生」の「へことば」である。

では、この「キリスト教の哲学」はいかにして「何かを行わせる」哲学となり得たのか。それはまさに「キリスト教の哲学」となったこと、つまり、「生の現象学」がキリスト教を哲学のうちに取り込んだことによるのではないだろうか。この問いに答えるためのヒントとなるのが『キリストのことば』

(二〇〇二)のなかで論じられている、「キリストが人間に語ることは」である。キリストが人間に語ることは、たとえば「汝の敵を愛せ」ということばは、「世界のことば」として捉

えれば理解しがたい矛盾であるが、このことばは「掟」として人間に差し迫り、何らかの感情を抱かせ、何らかの行為へと駆り立てる。

「生の現象学」のことばは、内在的な生の内的構造の解明を目的とした「世界のことば」であり、われわれに情感的に迫り、行動や感情を促す「生」の「へことば」ではなかった。「キリスト教の哲学」は、自らが「何かを行わせる」哲学であることを自らに要請するので、アンリは、感情や行為を喚起する聖書のことばを自らの哲学に絡み合わせ、「キリスト教の哲学」を「何かを行わせる」ものにした。自ら顕れる「キリスト教の哲学」の真理性は、この哲学が「何かを行わせる」ことによつて生ける者に確証され、それと同時に、「キリスト教の哲学」自身も生ける者に「何かを行わせる」ことによつて完結する。「生の現象学」から「キリスト教の哲学」に至つて、アンリは自らの哲学の内容を、この哲学の語り方によつて、「生」の「へことば」を通して体现したのである。

ヨーロッパ・キリスト教の「信」

—— 坂口ふみ氏の考察を踏まえて ——

若林 裕

一世紀に萌芽したキリスト教の広がり、二世紀以降にはヘレニズム・ローマ世界の広範囲に及ぶ。それに伴い、キリスト